

## 論文

### 「生産的および不生産的労働」について

広 田 純

まえがき

本稿は、同じ問題を取り扱おうとして未完におわった前稿「マルクスの『生産的労働』論」のつづきをなすものである。数年間の苦吟の末、当時に比べればたくしの理論的視野もいくらか拡大したが、その結果として、はじめの構想を多くの点で変更しなくてはならなくなった。そのために、あらたにはじめからかき直したものである。

まず前半で、スミスの「生産的および不生産的労働」をとり上げる。「生産的および不生産的労働」の問題性は、それ自体としては、人間の労働とその成果たる生産物の単純な関係を表現するにすぎない生産的労働という言葉が、事実上、もっと複雑な関係の表現としてもちいられ、しかも、その含意がばあいによってかわってくるという点にあると考えられるが、その意味では、スミスが原型をあたえてくれるのである。そこで、スミスを材料として、絡みあったさまざまな論点をときほぐしながら、まず全体の輪郭をえがき上げることにとめた。それが、行論の便宜上、

「生産的および不生産的労働」について

どうしても必要であったのである。

ついで後半で、マルクスをとりあげる。マルクスの「貨幣の資本への転化」は、まさにスミスの「生産的および不生産的労働」への対立と依存において成立するものと考えられるが、その過程があとづけられる。マルクスの初期の文献では、「資本としての貨幣」という言葉が特別の意味につかわれていて、これが、形こそちがうが、根本的にはスミスと同じ混乱をひきおこしているように考えられる。マルクス自身によるその克服の過程はわたくしのもっとも興味をそられた点であった。

問題の性質上、論点が多岐にわたり、ある程度大プロシキをひろげることがはさげがたいが、いかなる労働が価値を創造するか、換言すれば、物質的生産とはなにか、という論点で、全体をできるだけしぼるように努力した。というのは、現在の論争点はこの点にあるからである。

なお後半の部分は、次号に掲載される予定である。<sup>(1)</sup>

(1) 引用文献は左記による。ただし、訳文は適宜変更した。

スミス『諸国民の富』原書「モダン・ライブラリ版」訳書 松川・大内訳（岩波文庫）新訳のない部分は大内旧訳による。略号 Wealth

マルクス『資本論』原書「インスティテュート版」訳書 長谷部訳（青木文庫）略号 Kapital

マルクス『直接的生産過程の諸結果』訳書 マル・エン選集（大月版）第九卷下、向坂訳「資本論綱要」（岩波文庫）略

号『諸結果』

マルクス『剰余価値学説史』原書第一部、第二部「ドイツ版」、第三部「カウツキー版」訳書第一部長谷部訳、第二部長

洲訳（国民文庫）、第三部マル・エン全集（改造社版）第一一卷 略号 Mehrwert

マルクス『経済学批判要綱』原書「ドイツ版」訳書大月版 略号 Grundrisse

スミスは、『諸国民の富』第一篇第五章で、労働こそあらゆる物に支払われる本源的な価格である (Wealth, p. 30 (1) 一五二ページ) と述べ、また同じく第六章の冒頭でも、「初期未開の社会状態のもとでは」という限定をつけてではあるが、この労働の量が交換価値の大きさを規定する (p. 41 (1) 一八五ページ) と述べている。素朴ながら、スミスの労働価値説である。この点と、第六章に入ってから、「資財 (ストック)」が蓄積されて、「勤勉な人々」をやとうのに使用されるようになる、企業者に利潤が支払われ、付加価値が賃金と利潤に「分解」するようになる (p. 48 (1) 一八七ページ)、この利潤は、監督や指揮の労働にたいする賃金ではない (同前)、と述べている点をむすびつけると、スミスがここで語っていることは、事実上、資本の利潤は剰余労働に帰着するということにほかならない。以上の箇所とのつながりを念頭においてよむかぎり、第二篇第三章「資本の蓄積について、すなわち、生産的および不生産的労働について」の冒頭にある生産的労働の定義の含意が、マルクスが『剰余価値学説史』第四章で述べているように、生産的労働とは、剰余価値を生産する労働であり、資本を資本たらしめる労働であるという点にあることは、あきらかである。明白にそう述べられている箇所だけを拾ってみると、生産的労働たる「製造工の労働は、一般的に、かれが加工する材料の価値に、かれ自身の生活資料の価値と、かれの雇主の利潤の価値とを付加する。……なるほど、製造工は、その賃銀を雇主から前払してもらってはいいるが、その賃銀の価値は、一般に、かれが労働を加える対象の増大した価値のうちに利潤をとまなうて回収されるから、じつは雇主にはなんの費用もかからないのである。……人は多数の製造工をやとうことによって富み……。」 (p. 314 (2) 三三七ページ) 生産的労働のこの定義には、事実上、資本

「生産的および不生産的労働」について

の利潤は、労働者を賃銀（労働力の価値）の大きさに表現される労働時間をこえて労働させることによってえられる。剰余労働に帰着し、資本とはかかる剰余労働を強制する社会的な力、生産関係にはかならない、ということが含意されている。したがってまた、それがどんな物を生産する労働であるかという、労働の具体的な形態、生産物の質料的な規定（Mehrwert I S. 122 一一八ページ）は、生産的労働のこの規定と何の関係もない、ということになるはずである。

ところが同時に、まさに同じ箇所で、スミスは、生産的労働とは有形物に固定し、ストックとして蓄積されるような労働であり、これにたいして、不生産的労働とは、その成果が労働と同時に消失してあとに何も残さないような、いわゆるサービスである、というまったく別個の定義を述べているのである。「製造工の労働は、ある特定の対象または販売しうる商品にそれ自身を固定し、実現するのであって、その商品は労働がすんだあとでも、少くともしばらくのあいだは存続する。それは、いわば、ある別の機会に必要に応じて使用されるために、ストックされ、たくわえられる一定量の労働である。この対象……は、後に必要に応じて、はじめにそれを生産したのと等量の労働を活動させることができる。これにたいして、召使の労働は、ある特定の対象または販売しうる商品にそれ自身を固定し、実現しない。かれのサービスは、一般にそれがおこなわれるまさにその瞬間に消滅してしまう……。」（Wealth, p. 314 一〇三三七―八ページ）これがまえの定義とならべられて、スミスのつもりでは、生産的労働と不生産的労働の一つの定義をなしているのである。この定義のきそになっている、必要に応じて、それをもって他人の生きた労働を動員しうる資財（ストック）の概念は、すでに第一篇第五章の支配労働説にまでさかのぼりうるのであるが、直接には第二篇、序論および第一章における資本の定義をうけているものと考えられる。そこでは、労働の生産力は分業にもと

づくものであるが、あらかじめ食料品や材料、道具などのストックが蓄積されていなければ、分業をおこなうことは不可能である、したがって、労働の生産力とはストックの生産力である (p. 259~260 (2) 二二一~二二二ページ)、という意味のことが述べられたあとで、ある人の所有する資財 (ストック) のうち「かれが自分にこの収入をもたらしてくれるものと期待する部分が、かれの資本とよばれる」(p. 263 (2) 二三五ページ)と定義されているのである。

生産的労働のはじめの定義では、資本を資本たらしめるものが生産的労働であったが、ここでは、資本がいちおう生産的労働との関連の外で、ストックとして理解されていることが注目される。そしてこのような資本 (ストック) の理解をきそとして、こんどは逆に、生産的労働者は資本家の手で蓄積された資本 (ストック) によって「やしなわれる」といういい方がなされるのである。スミスは第二篇第三章で生産的労働と不生産的労働の区別をしたあと、年々の生産物は、資本を回収する部分と収入たる利潤および地代を構成する部分とにわかれるが、そのうち資本は、もっぱら生産的労働者をやしなうのに使用される、「それは、かれにたいして資本としての機能を果たした後、それらの労働者の収入を構成する」(p. 316 (2) 三四二ページ)、それにたいして収入は、おおく不生産的労働者をやしなうのに使用される、「したがって、生産的な人手と不生産的な人手の割合は、……資本を回収するために予定される部分と、……収入を構成する部分との割合に大いに依存する」(p. 317 (2) 三四四ページ)と述べている。

マルクスが指摘しているように、ここでは収入という言葉が二重の意味に、すなわち、第一には資本の生みだす収入、剰余価値の意味に、第二には剰余価値のうち収入として個人的に消費される部分の意味にもちいられている (Marx Capital I S. 631 (4) 九二〇~二二二ページ)。ここでの問題が蓄積にあることを考慮すると、スミスが資本と収入の区別でいwantすることは、けっきょく、資本家がまず手に入れる生産物 (ストック) が生産的に消費されるか、不生産的に消

費されるかという、生産物の使途、消費の仕方にかんする区別である。生産的労働と不生産的労働の区別で、資本との関連で労働についてしたのと同じような区別を、こんどは、生産物の使途にかんしてするわけである。その上でつぎのように述べられる。「したがって、資本と収入の割合は、どこでも、勤勉と怠惰の割合を規定しているようにおもわれる。」(Wealth, p. 320 (2) 三五〇ページ) 貯蓄の意義を説いて「勤労ではなく、節儉が資本増加の直接の原因である。たしかに勤労は、節儉が蓄積する対象物を提供する。しかし、たとえ勤労がどれだけのものをつくりだそうとも、節儉がそれを貯蓄し、蓄積しないならば、資本がそれによって増加するということはけっしてないであろう。」(p. 321 (2) 三五一ページ) はじめ、資本を生産するものは生産的労働である、と述べられていたのにたいして、ここでは逆に、蓄積された資本が人々を勤勉ならしめ、生産的労働者たらしめる、と語られているのである。

スミスがこの第二篇第三章で、一方では生産的労働と不生産的労働の区別によって、他方では資本と収入の区別によって、しかもこの二つの区別を同じ区別の別のあらわし方であるかのように語ることによって、けっきょく、表現しようとした資本と労働にかんするかれ自身の表象は、おおそつぎのようなものと考えられる。一方では、資本が剰余価値を生産し、富を増加するのは、それが生産的労働者によって生産的に消費されるかぎりにおいてであって、資本の生産力は、かかる労働の生産力にほかならない。ここには、蓄積された形態における貨幣あるいは財貨において富を理解する重金主義的、重商主義的表象にたいする明白な否定がみられる。資本家によって貯蓄されるものは、収入として消費されるものと同様に、消費される、ただし生産的労働者によって消費されるのであって、「消費そのものは同一であっても、消費者がちがうのである。」(p. 322 (2) 三五二ページ) 他方では、労働が生産的労働として剰余価値を生産し、富を増加するのは、資本家によって蓄積された資本(ストック)によってやしなわれるかぎりにお

いてであって、労働を生産的労働たらしめるものは資本にはかならない。マルクスが、『剰余価値学説史』第一部の中で資本の生産性と労働の生産性の補完的な関係について述べたつぎの言葉は、資本と労働の関係にかんするスミスの表象の描写としても、きわめて適切である。「剰余労働を強奪し、労働の社会的生産諸力を自分のものだと要求することが、資本の自然的属性として……現象するとすれば、逆に、労働自身の社会的生産諸力を資本の生産諸力として措定し、労働自身の剰余を剰余価値として、資本の自己増殖として措定することが、労働の自然的属性として現象する。」(Mehrwert I S. 358 五七七ページ)この補完関係において、スミスは、生産力の担い手としての、社会発展の主導力としての、産業資本の歴史的使命を表明するわけである。

資本は労働と交換されることによってはじめ、資本として機能し、剰余価値を生産する、生産的労働とは、資本と交換されて、剰余価値を生産する労働である、というスミスの第一の規定をつらぬいていくかぎり、かかる生産的労働こそが資本を資本たらしめる実体的なきそであって、それとは無関係に、ストックとして存在する資本が労働者を「やしなう」わけではけっしてない。それにもかかわらず、同時にスミスがそう考えているのは、剰余価値の生産を準備する資本と労働の交換、賃銀(生活手段)と労働力の交換の中に、すでに、資本という規定をもちこむからにはかならない。

スミスは第二篇第一章「資財(ストック)の分類について」の中で、資本を流動資本と固定資本にわけ、さらに流動資本を、(1)貨幣、(2)食料品のストック、(3)「衣服、家具および建築の、未加工かまたは多少とも加工した材料」、(4)完製品の四部分にわけている(Wealth, p. 266 (2)二四三〜四ページ)。そして、資本は「それがその使用者の所有にとどまるか、または同一の形態にとどまるかするあいだは、その使用者になんらの収入または利潤をもたらない、

「生産的および不生産的労働」について

……かれの資本は、つねにある一つの形態でかれの手をはなれ、また別の形態でその手にかえってくるのであって、それがかれにある利潤をもたらすことができるのは、このような流動、つまり継続的な交換によってだけである」(p. 262~3 (2) 三三六ページ)、「主人をかえない」固定資本といえども、かかる「流動資本を媒介とせずして収入をもたらすことはけつてできない」(p. 267 (2) 二四四ページ)と述べている。

スミスは、利潤をもたらすために資本が使用される「二つの異なった方法」の区別を通じて、一国の富は、蓄蔵形態に固定された貨幣あるいは財貨の多寡に依存するのではなくて、豊富な財貨のたえざる再生産に依存するという趣旨のことを、ここでもくりかえしているわけであるが、そのさい、マルクスが『資本論』第二部第十章「固定資本と流動資本にかんする諸学説、重農主義者とA・スミス」の中で批判しているように、流動資本という規定の中に埋没してしまつて、流通形態にある資本、商品資本および貨幣資本と、生産資本中の流動的部分とを区別していない。(Karl Marx Capital II S. 187 (6) 二四七ページ)。スミスが流動資本としてあげる(1)貨幣は貨幣資本であり、(2)食料品、(4)完製品は商品資本である。これにたいして(3)未加工かまたは多少とも加工した材料は、販売されて「主人をかえる」べく、生産者あるいは商人の手もとで待機しているかぎりでは、商品資本であるが、生産者の手もとで加工の準備段階あるいは加工の過程そのもの、つまり生産的消費の過程にあるかぎりでは、生産資本である。そして、このように流通形態にある資本と生産資本とが区別されていないことの結果として、これらの形態において資本のはたす異なる機能、一方は販売、購買という形式的な姿態変換の機能、他方は生産過程における生産資本要素の生産物への実体的な転形―これを通じて、資本の価値が維持され、剰余価値が生産される―という機能が、ともに「ある一つの形態でかれの手をはなれ、また別の形態でその手にかえってくる……このような流動、つまり継続的な交換」という言葉で、混同されたま



まで表現されているのである (Kapital II S. 192, 197~8 (6)二三三、二六〇ページ)。

資本と労働の交換において、資本家の「前払」する賃銀は、たしかに資本家にとっては資本である。他方、労働者は、かれの唯一の商品である労働力と交換に賃銀をかく得する。労働者にとっては、この賃銀がかれの収入である。しかし、この賃銀が資本家にとっては資本であり、労働者にとっては収入であるという事情は、この交換それ自体の性格とは何の関係もないことである。交換それ自体はたんなる商品と商品の交換、形式的な姿態変換であって、資本家は、一方で賃銀において失ったものを、他方で生産資本の一要素たる労働力の形でえているのである。したがって、この交換によって、「前払」された賃銀が、利潤をとまって回収されうるのは、この交換によって資本に合体され、生産資本の一要素となった労働力が、不変資本要素とともに生産的に消費されて、賃銀等価のほかに剰余価値をふくむ生産物に実体的に転形されるからにはかならない。

スミスは、流通形態にある資本と生産資本を混同する結果として、資本家の手もとにある商品資本、(2)食料品および(4)完製品のうち、賃銀によって買われる生活手段のストックの部分と、賃銀として労働力に投下される可変資本を同一視し (Kapital II S. 202~3, 209 (6)二六六~七、二七五ページ)、賃銀(生活手段)が資本家の手から生産的労働者の手にわたり、労働者によって消費されるという事実を、資本は「かれ(資本家)にたいして資本としての機能を果たした後、それらの労働者の収入を構成する」 (Wealth, p. 316 (2)三四二ページ)と考える。これが生産的労働者は資本によつて「やしなわれる」という表象のきそにあるスミスの認識であるが、資本家の手から労働者の手にわたつて、その収入になるのは、賃銀たる貨幣あるいは生活手段であって、資本ではない。この交換を通じて、資本は流通資本の形態から労働力(生産資本)の形態に転化して、あくまで資本家の手にとどまっている。しかも、資本が現実に資

本として機能して、その価値を維持し、剰余価値を生産するのは、まさにこの生産資本の形態においてである。生産的に消費されるのは、労働者にわたされた賃銀ではなく、その交換を通じて資本に合体された労働者の労働力である（*Kapital* II S. 159 一一三ページ）。労働者による賃銀の消費は、たとえかれが生産的労働者であっても、あくまで収入の消費、個人的消費であって、その価値が消費とともに消滅してしまうことは、不生産的労働者の消費のばあいと同じである。

マルクスは『資本論』第二部第三篇の「A・スミスにおける資本と収入」の項で（S. 383 (7) 五七三、五八五ページ）、資本が労働者に収入をあたえるというスミスの言葉を引用して批判しているが、そこで「しかし資本家は、ましていわんや資本家の理論的代弁者たる経済学者は、労働者に支払われた貨幣は、いぜんとして、かれ、資本家の貨幣だという妄想から、容易には脱することができない」（II S. 452 (7) 五八五ページ）と述べている。

(1) 資本は、資本として機能した後、労働者の収入となる、という趣旨の前掲のスミスの文章（*Wealth*, p. 316 (2) 三四二ページ）は、『剰余価値学説史』第一部にも引用されている（*Mehrwert*, S. 122 二一九ページ）が、そのときにはコメントなしで、そのままみすごされている。

## 二

スミスは、一方では、資本家の所有する生活手段のストックは、生産的労働者の賃銀として消費されてはじめて、資本として機能する、ストックを資本たらしめるものは生産的労働にはかならない、と考えた。これが生産的労働の第一の規定に表現されている観点である。ところが他方では、逆に、資本家によって蓄積されるストックが、生産的労働の媒介なしに、それ自体として資本と規定されて、生産的労働者がこの資本によってやしなわれるかのように述べて

いる。これが、生産的労働とは、有形物に固定されて、ストックとして蓄積されうるような労働であるという第二の規定の含意であった。

資本家の手で蓄積されたストックによって、生産的労働者がやしなわれるかのような妄想は、労働力に投下される可変資本と、賃銀によって買われる生活手段のストックを混同することにもとづくものであった。労働者が賃銀の質料的要素を、資本家の所有する生活手段のストックから引き出すという事実を、スミスは、労働者が資本家のストックによってやしなわれる、と表現しているのである。これがまさに資本の観点であることはいうまでもない。

とはいえ、かく考えられるについては、なお、理論上の問題として検討されるべき事情が、そこに介在しているようにおもわれる。以下、それを二つの論点にしぼって検討してみたい。第一は総資本の再生産の条件に関連し、第二は資本の蓄積に関連する。

まず第一の点について。資本家によって「前払」された賃銀の価値が利潤をともなつて回収されるのは、すでに述べたように、生産資本の一要素としての労働力の生産的消費によるものであって、労働者による賃銀（生活手段）の個人的消費とは無関係である。しかしながら、そのこととは別に、資本家によって「前払」された賃銀の価値が利潤をともなつて回収されるという過程がくり返しおこなわれる、つまり、かかるものとしての資本関係が再生産されるためには、「前払」される賃銀の大きさに応じて、社会全体の生産物の一部が、労働者の賃銀によって買われうるような、労働者の収入として消費されうるような使用形態、すなわち必要生活手段の形態をとっていなければならないこともまたあきらかである。マルクスは『剰余価値学説史』第四章「生産的および不生産的労働」の中で、つぎのように述べている。「A・スミスにしたがつて、直接に資本と交換される労働が生産的だとするばあいには、形態の

ほかになお、労働と交換される資本の質料的諸成分も問題になる。この資本は、必要生活手段、つまりたいいは商品、物質的な物 (Dinge) に帰着する。」 (Mehrwert, S. 173 二九六～七ページ) これは総資本の再生産に関連する問題であるから、文章全体が岐論として括弧の中に入っている。

資本の直接的生産過程、剰余価値の生産にとつては、労働が使用価値の上からいって、いかなる生産物に対象化されるかということは、どうでもよいことである。したがって、資本家の収入の実現形態として、不生産的にのみ消費されるような生産物—奢侈品—を生産する労働も、剰余価値を生産し、投下された資本を利潤とともに回収せしめるかぎり、生産的労働である。このことと、生産物が奢侈品であつて、再び他の生産物あるいは労働力の再生産過程に入りこむことがないという事情とは、何の関係もないことである。しかし、それにもかかわらず、奢侈品の生産は、不変資本の要素を別としても、賃銀(必要生活手段)を質料の上で再生産するものではない。かれらの生産物は奢侈品であつて、賃銀要素たる必要生活手段ではないから、かれらの賃銀の支出は、必要生活手段を生産する他の部門の剰余生産物(部門内消費をこえる生産物)にたいしておこなわれなければならない。この社会的な質料変換は、資本家が収入の一部を奢侈品に支出し、不生産的に消費することを通じておこなわれる。したがって、奢侈品を生産する労働が剰余価値を生産しうることは、必要生活手段を生産する労働のばあいと同様であるけれども、前者の規模は、後者の剰余生産物の大きさによって制約されているのである。

マルクスは『剰余価値学説史』第三部の中にある岐論「収入と資本の交換」(『資本論』第二部第三篇の「再生産表式」にきわめて近い内容のことが、まとまった形で述べられている)の結びの部分で、つぎのように述べている。

「剰余価値そのものの考察にさいしては、生産物の現物形態……は問題にならない。しかし、現実の再生産過程の考

察にあたつては、この点は重要である。それは、その形態自体を理解するためであり、また奢侈品生産その他が再生産におよぼす影響のためである。ここでもまたわれわれは、使用価値がそれ自体としていかに経済的重要性をもっているか、の一つの例をみる。」(S. 298 三〇二ページ)

以上のことは、スミスによって無視された不変資本(生産手段)の再生産、填補を考慮することによって、いっそうあきらかになる。なぜなら、質料の上から「資本を収入に対立させてとらえるならば、不変資本が本来的資本として……現象する」(Mehrwert I S. 182 三二〇ページ)からである。

スミスは『諸国民の富』第二篇第二章で、社会の総生産物の交換価値を賃銀、利潤、地代の三収入に帰着させたあと、まったくとうとつに、総収入と純収入の区別という問題に入っていく。そして、まず固定資本について、固定資本を維持するために「使用される職人たちは、かれらの労働の全価値を、直接の消費のために留保されるかれらのストックにくり入れるかも知れないから、そういう労働の価格が純収入の一部をなすこともありうる」(Wealth p. 271 (2) 二五一ページ)が、しかし、固定資本そのものは生活資料ではないから、その維持費は「社会の純収入から除外されなければならない。」(同前)流動資本について、それは個人にとつては資本であつて、かれ自身の純収入ではないが、「他の人々のこういう(直接の消費のために留保される—引用者)ストックにくりいれられるということはありうる。」(p. 273 (2) 二五四ページ)したがって、社会全体については、貨幣を除く流動資本の三分分は「規則的に引き上げられて、社会の固定資本か、または直接の消費のために留保されるストックか、のいずれかにくりいれられる。これらの消費されうる財貨のなかで、およそ前者を維持するのに使用されぬものは、すべて後者に帰し、社会の純収入の一部になる」(p. 272 (2) 二五四ページ)と述べている。

スミスは、固定資本を維持する労働について、かれらの賃銀は収入であるが、生産物は収入の質料的要素でないという事情に注目しているが、このことは、賃銀だけでなく、収入として消費される利潤についてもいいうることである。また、スミスのいう流動資本の(3)「衣服、家具および建築の未加工かまたは多少とも加工した材料」(p. 226) (二四三ページ)についても、価値の上からいって賃銀および利潤をあらわす部分については、事情は固定資本のばあいと同様である。他方、流動資本の(2)食料品、(4)完製品 (p. 226) (二四三〜四ページ)のうち、質料の上からいって「消費しうる財貨」である部分は、社会全体の収入が支出される消費ファンドをなすわけであるが、価値の上からいえば、固定資本の維持費、材料費を回収する部分をふくんでいなければならない。

マルクスは『資本論』第二部第三篇で、上のスミスの文章を引用し、「もしA・スミスが、以前には固定資本と名づけるものの再生産の考察にさいして、こんどは流動資本と名づけるものの考察にさいして、おもいかべていた思想的断片を総括したとすれば、かれは、つぎのような結論に到達したことであろう——」(II S. 370 (7) 四七九ページ)と述べて、マルクス自身の再生産表式の構想——生産手段生産部門の可変資本および剰余価値をあらわす生産物部分と、消費手段生産部門の不変資本をあらわす生産物部分の間に、「収入と資本の交換」がおこなわれ、かかる社会的な質料変換を通じて、一方では収入が消費手段に実現され、他方では不変資本が生産手段で填補される——を導入するのである。

スミスは、総収入と純収入を区別するというこのむなしきころみにおいて、事実上、質料的にいえばまさに「本来的資本」である不変資本部分をふくむ資本の価値填補と質料填補の区別を意識していたと考えられる。しかし、生産物の交換価値は賃銀、利潤、地代の三収入に分解するという、しつようにつらぬかれる「A・スミスのドグマ」

の結果として、不変資本の再生産、填補の問題は、けっきょく、スミスの視野から消えていく。と同時に、資本質料の再生産、填補の条件という問題が、それとして別個に提起される可能性もなくなってしまうて、これが、かえって、資本の価値填補、剰余価値生産の条件であるかのように表現されることになるのである。

資本家によって「前払」される賃銀の価値が利潤をとまって回収されるという過程がくり返しおこなわれる、つまり資本関係が再生産されるためには、一方で労働者による賃銀（必要生活手段）の消費がおこなわれると同時に、他方では、総資本の一部によって、消費される必要生活手段の再生産がおこなわれなければならない。これが、このばあいの再生産の条件であるが、すでに述べたように、労働力に投下された可変資本と、賃銀によって買われる必要生活手段のストックを混同するスミスにとっては、このことが、生産的労働が生産的労働として機能し、剰余価値を生産しうるためには、あらかじめ、生産的労働者をやしなうべき必要生活手段のストックが資本家の手もとに蓄積されていなければならない、というふうにうけとられる。つまり、総資本の再生産の条件、質料的な制約が、資本関係そのものに先行すべきストックの蓄積としてあらわれるのである。

すでに述べたように、スミスは、資本家が入手する生産物のストックを、その使途にかんして資本と収入に区別している。生産的労働者に消費されて、利潤をとまって回収される生産物部分が資本であり、これにたいして、生産的労働者によって消費されて、回収されない部分が収入である。したがって、スミスのいう資本と収入の区別は、けっきょく生産的消費と不生産的消費の区別に帰着する。この言葉自体は、おそらくフィオクラットに由来するものであるが、労働力に投下された資本と、賃銀によって買われる生活手段のストックの混同—スミスにもある—をドグマ化する意味をもつものである。

「生産的消費者たるものは、ただ生産的労働者のみである」<sup>(2)</sup>といわれる。すでに述べたように、生産的労働者による賃銀（生活手段）の消費は、それ自体としては収入の消費、個人的消費であって、その価値を回収せしめるものではないことは、不生産的労働者の消費と同じである。それが生産的消費として現象するのは、賃銀に「前払」された資本が、生産的労働によって、利潤をとまなうて回収されるからにはかならない。生産的に消費されるのは、資本に合体され、生産資本の一要素となった労働力のみであって、労働者にわたされる賃銀（生活手段）ではない。

生産的労働者による賃銀（生活手段）の消費を生産的とみなす論者も、生産的である範囲を、労働力を再生産するのに必要な最低限の支出に限定することによって、事実上、以上のことをみとめているのである。<sup>(3)</sup>

生産的消費と不生産的消費の区別は、剰余価値を生産するものとしての生産的労働の規定をきそにすることによって、はじめて、それ自体としては個人的消費にすぎないものが生産的消費であるという、表現上の不合理性を脱却することができる。そして、消費にかんする区別自体は、資本質料の再生産、填補の条件を表現するものとして、正しく位置づけられるのである。

生産的消費と不生産的消費の区別は、まさにドグマとして、生産的労働と不生産的労働の区別を吸収し、解消する役割を演ずるものであるが、<sup>(4)</sup>スミスが資本と収入を区別して、資本が労働者を「やしなう」というとき、スミス自身、このドグマ化の方向に大きく傾斜している、といわなければならない。

マルクスは、『経済学批判要綱』の中の生産的労働にかんする註で、「他の経済学者たちは、生産的と不生産的の区別は、生産に関連させるのでなく、消費に関連させなければならないという。まさに逆である」(Grundrisse, S. 22-3 (2) 一二六ページ)と述べたあと、同様にスミスの生産的労働にふれた箇所で、どんな種類の労働がおこなわ



れ、どんな形態で労働が物質化されるか、ということは、剰余価値の生産にとっては、どうでもよいことであるが、「のちに出てくる諸観点からは、どうでもよいことではない」(S. 234 (2) 二四九～二五〇ページ)と注意している。そして、これをうけて、『剰余価値学説史』の中の一連の岐論<sup>(5)</sup>で、「A・スミスのドグマ」を批判するという形をとりながら、次第に、総資本の再生産、填補を媒介する資本の流通と収入の流通の絡みあいの問題に入っていくのである。これが後の『資本論』第二部第三篇の「再生産表式」として結実するわけであるが、「直接的生産過程の諸結果」には、すでに、「このことにかんする詳細は、再生産過程にかんする第二巻第三章に属する」(『資本論綱要』岩波文庫 二一七ページ、マ・エ選集大月版 第九卷四四八～九ページ)と述べられている。

このようにして「再生産表式」の成立は、スミスにあっては、なお、資本の価値填補、剰余価値の生産の観点の中に埋没し、これをくもらせていた質料填補、再生産の観点が、マルクスによって析出され、正しく位置づけられる過程だと考えることができるのである。

(1) ケネー「経済表」原表(坂田訳書二四ページ)における「生産的支出」*dépense productive* と「不生産的支出」*dépense stérile* 参照。

(2) J・S・ミル『経済学原理』末永訳書(世界古典文庫) 一一四ページ。

(3) J・S・ミル「生産的労働者の消費であっても、そのすべてが生産的消費だというわけではない。……かれらがその健康や体力や作業能率を維持し、改良するために、あるいはその後継者たるべき他の生産的労働者を教育するために、消費するところのものは、生産的消費である。しかし、快楽あるいは奢侈のためにする消費は、なまけ者によってなされると勤勉な人によってなされるとを問わず、生産を目的とせず、また生産を増進しないのであるから、不生産的消費とみなすべきである。」(前掲書 一一四ページ)

(4) J・S・ミルは、前掲書の第一篇第三章「不生産的労働について」において、スミスの第二の規定にしたがって、ストッフ「生産的および不生産的労働」について

クとして蓄積されうる物質的生産物に固定される労働を生産的労働とよび、ついで生産的消費の区別を述べたあと、結びの部分でつぎのようにいつている。「われわれは、このことによって、社会の富にとつては、生産的労働と不生産的労働の区別よりも一層重大な区別があることを知る。それは、生産的消費にたいして物を供給するための労働と、不生産的消費にたいして物を供給するための労働との区別、一国の生産資源を維持し、増加させるのに使用される労働と、その他の方面に使用される労働との区別である。」(一二六ページ)

(5) *Mehrwert I* S. 72~114, S. 151~161, S. 193~214 (一四二~二〇七ページ、二六一~二七八ページ、三二七~三五九ページ)

*Mehrwert I* S. 473~488 (一一四~一二六ページ)

*Mehrwert III* S. 291~298 (一九六~二〇三ページ)

### 三

以上は、資本家のストックが、生産的労働によって資本になるのではなくて、逆に、資本たるストックの「前払」によって、生産的労働者がやしなわれるかのように、スミスが考えるさい、その背景をなす第一の事情についてであった。すでに述べたように、第二の事情は、蓄積の問題に関連する。

資本が現実には資本として機能するのは、生産資本(労働力および生産手段)の形態においてであるが、そのためには、投下された資本が、順次に、貨幣資本、生産資本、商品資本の形態をとつて、資本循環の各段階を通過するのになければならない。

ところで、過程そのものの本性からして、投下資本は、つぎの段階に移行するまでは、一定の期間各形態に固定されて、そこに滞留している。それぞれの段階における機能を果たした後に、つぎの段階に移行しうるわけであつて、

「循環そのものが、一定の期間にわたって、個々の循環段階における資本の固定化を生ぜしめるのは、理の当然である。」(Kapital II S.48 (5) 七一ページ) 投下資本の各部分が、同時に、資本循環の各段階にあるような資本分割を前提とすれば、投下資本の各部分は、貨幣資本、生産資本、商品資本の各形態に固定されて、これらの段階に、一定期間滞留しているのである。

この投下資本のある形態への固定、滞留という事實は、往々、投下された価値の資本としての持続性と、資本の質料的要素の耐久性とを混同させるきとなる。しかし、投下資本が資本として機能し、かくしてその価値が維持され、増殖することと、その投下資本が固定されている質料的要素が、使用価値にかんして耐久の属して、すぐには消滅しないということとは、まったく異なる、別個のことがらに属する。

すでに述べたように、スミスは、分業がおこなわれ、労働の生産力が改善されるためには、あらかじめ、材料、道具、食料品などのストックが蓄積されていなければならない、と述べている (p.259~260 (2) 二二一~二三ページ)。そして、これをうけて、生産的労働の定義の箇所 (p.314~5 (2) 三三七ページ) で、生産的労働とは、有形物に固定されて、「ストックされ、たくわえられる一定量の労働」であり、「必要に応じて、はじめにそれを生産したのと等量の労働を活動させる」ような労働であるが、これにたいして不生産的労働とは、労働と共に消失して、あとに何も残さないような、いわゆるサービスである、という第二の規定を述べているのである。

ストックとして蓄積されうるとか、多少とも耐久であるとかいうことは、まさに、資本循環の各段階に固定された投下資本要素の質料的な属性にかんすることである。このことと、「ストックされ、たくわえられた一定量の労働」が、他日、「それを生産したのと等量の労働を活動させる」というスミスの言葉に暗に表現されている、投下価値

の資本としての持続ということの間には、何の関係もない。スミスは、あきらかに、この二つのことを混同した上で、生産的労働とは、かかる資本（ストック）を生産するような労働である、と述べているのである。

商品が生産されて販売されるまでの期間（販買期間）、投下資本は、商品在荷（ストック）の形態に固定されて、流通部面に滞留している。

運輸業のように、その有目的効果が生産過程でのみ消費されて、何等の有形物を生産しないばあいには、そもそも商品在荷の形成はありえない（Kapital II S. 50～1, S. 144～6 (5) 七二～四ページ、一九三～六ページ参照）。これは自明の理であって、このばあいには、投下資本は、主として労働手段の形態に固定されているのである。

また、商品在荷の要素たる生産物が、使用価値にかんして耐久的存在であるか否かは、保管のために必要な資本投下の大きさを規定する。使用価値が消滅しやすく、生産されたあとすぐに消費されなければならないような生産物が、資本による生産の対象となりたいのは、このような意味においてである。したがって、保管技術の発達、および、運輸手段の発達、人口の集中などによる販売時間の短縮の結果として、かかる生産物が資本の商品となりうることは、事実のしめすとおりである（Kapital II S. 122～3 (5) 一六六ページ）。

商品形態に固定された価値の資本としての持続性が、商品在荷の質料的要素たる生産物の耐久性にもとづくものでないことは、つぎの事実からあきらかであろう。社会的に標準的な保管条件の下でも、ある種の品質の悪化や、一定の量目の減少が避けられないようなばあいがあるが、このような損耗は、商品の価値を低下させるものではない。また、保管のために投下された資本は、質料的にいえば、まさに社会にとっての「空費」であるけれども、生産のために投下された資本と同様に、増大した商品価値において、自らを維持、増殖する（Kapital II S. 132～3, S. 139～143）。

(5) 一七九ページ、一八七—一九二ページ)。

商品形態における資本の機能は、剰余価値をふくむ商品の貨幣への転形  $W \rightarrow G$  である。すなわち、商品在荷を構成する個々の商品はたえず交替している。一方では、たえず在荷が流動化され、商品が販売されて、貨幣形態で回収されるとともに、他方では、生産過程のたえざる反復、再生産の結果として、あたらしい商品によって、在荷がたえず補充される。このような姿態変換、諸形態のたえざる流動を通じて、投下資本が資本として維持され、増殖される。流通停滞の結果たる異常在荷を別とすれば、一定の商品在荷の存在、流通の停滞が、このばあい円滑な商品流通の条件なのである (Kapital II S. 142 (5) 一九一ページ)。

生産資本についても、原材料が生産在荷として生産者の手もとに準備されているかぎりでは、商品在荷について述べたことがそのままあてはまる。一方では、生産的消費による在荷のたえざる解消、他方では、貨幣の原材料への転形による在荷の補充、かかる諸形態の流動的な交替を通じて、投下資本が資本として機能する。再生産過程の連続性が、原材料供給のおこりうべき中断によってさまたげられないためには、一定の大きさの生産在荷を維持すること、投下資本の一部がつねにかかる「遊休」資本の形態で生産部面に滞留していることが必要なのである (Kapital II S. 116, S. 136, S. 243 (5) 一五八ページ、一八三ページ、(6) 三一六ページ)。

さらに、生産過程そのものにおいても、過程の技術的な条件からして、投下資本の滞留が生ずる。すなわち、生産が開始されてから完成生産物が生産されるまでには、一定の期間(生産期間)が必要であるが、そのあいだ、不変流動資本および労働力に投下された資本は、「部分生産物」、「未完成生産物」の形態に固定されて、生産過程そのものに滞留しているのである。この期間は、第一には労働期間、「完成生産物を提供するに必要な一連の労働日数」(Ka-

pial II S. 227 (6) (二九六ページ) によって、第二には、生産過程の本性によって条件づけられた労働過程の中断期間 (Kapital II S. 116~7, S. 235 (5) 一五九ページ (6) 三〇七ページ) によって規定される。

生産過程そのものにおいては、投下された価値の資本としての持続性と、投下資本の質料的要素の耐久性、不滅性を混同する余地は比較的少ない。

生産過程に滞留する投下資本の価値が、生産期間を通じて維持されるのは、「部分的生産物」、「未完成生産物」がたえず生産的に消費されて、その価値を生産物に移転するからであって、投下資本の質料的要素の耐久性、不滅性にもとづくものでないことは、あきらかである。原材料の一部は、生産物への転形の過程で、生産物の質料に入りこむことなく、廃物として消失してしまう。しかし、廃物による損耗の比率が標準的なものであるかぎり、その部分の価値まで、生産物の価値に移転するのである (Kapital I S. 213~4 (2) 三六九~三七〇ページ)。

スミスは、生産的労働の第二の規定において、投下資本が、各循環段階に一時滞留し、それぞれの形態に固定されながら、かかる形態の流動的な交替を通じて、たえず自立的な価値として、維持されるということを、投下資本がストックとして固定されている生産物および原材料の質料的な属性と混同しているのである。マルクスは、『剰余価値学説史』第四章「生産的および不生産的労働」の末尾で、つぎのように述べている。「生産的労働と不生産的労働の第二の区別づけにおいては、スミスはまったく——より広い形で——重金主義の区別づけに逆戻りしている。……つまり、重金主義が金銀とほかの諸商品の間でするのと同じ区別を、スミスは、商品とサービスについてしているのである。」 (Mehrwert I S. 267 四三五~三六ページ)

ところで、投下資本の大きさを一定とすれば、資本が投下されてから回収されるまで、生産部面および流通部面に

滞留していなければならない期間（回転期間）が長ければ長いほど、生産資本の形態で生産的に消費されうる資本部分が小さくなつて、剰余価値生産の規模がそれだけ制限されることは、あきらかである。

投下資本は、生産資本の形態で、つまり、労働力および生産手段として、生産的に消費されるかぎりにおいて、現実に資本として機能し、剰余価値を生産する。これにたいして、生産部面にあると流通部面にあるとを問わず、いずれかの形態に固定され、滞留しているかぎりにおいては、この剰余価値の生産に制限的に作用するのである。かくとらえられた資本は、利潤として、社会の総剰余価値が個別資本に分配される関係を規定する。

すでに述べたように、スマスは、第二編第二章で、総収入と純収入を区別しようとしている。そして、固定資本と貨幣の維持費は、社会の純収入のいかなる部分をもなすものではなく、経費として、純収入から控除されるべきものであるが、これにたいして、固定資本の維持にあてられる部分を除く流動資本の三部分、(2)食料品、(3)材料、(4)完製品は、すべて社会の純収入に属する、と述べている。

固定資本を設置し、維持するための経費、貨幣を収集し、維持するための経費は、いずれも社会の純収入からの控除をなすという点で「たがいにくわめてよく似ている」(p.271~2 p.273~4) (2)二五一~三三ページ、二五五~二五六ページ)。したがって、これら経費についての節約は、「社会の純収入についてなされる一つの改善」である (p.271~2, p.276) (2)二五二~三三ページ、二六六~二六七ページ)。商人の保有する支払準備金は「死せる資財 (dead stock)」(p.304) (2)三三八ページ) にすぎない。これにたいして、固定資本の維持にあてられる部分と貨幣を除く流動資本は、個人にとつては経費であるが、「社会の純収入の一部」になる (p.272~3 (2)二五四ページ)。「ある資本が使用しうる勤労の量は、あきらかに、その資本が、仕事の性質に適した材料、道具および生活資料を供給しうる職人の数に等しいにちが

いない」(p. 280 (2) 二六九ページ)。貨幣は「流通の大車輪であり、商業の偉大な用具である。」(p. 276 (2) 二六一ページ)

ここには、すでに述べたように、総資本の再生産、質料填補の観点が混入していて、敘述の脈絡を追うことがきわめて困難であるが、スミスが、第二篇第一章で、流動資本は「ある一つの形態でかれの手をはなれ、また別の形態でその手に帰ってくる」ことによって収入をもたらす(p. 282~3 (2) 二三六ページ)、固定資本は、かかる流動資本を媒介とすることによってのみ、収入をもたらすことができる(p. 287 (2) 二四四ページ)と述べていることをあわせ考えると、ここでスミスは、事実上、過程に固定され、滞留して、利潤の分配にはあずかるが、剰余価値の生産には制限的に作用するかぎりでの資本と、現実には資本として機能し、剰余価値を生産するかぎりでの資本を区別せんとするものようである。

つまりスミスは、投下資本の生産部面および流通部面への滞留、その結果たる再生産過程の流動状態の停滞を、固定資本という感性的にあきらかな形態と不妊の蓄蔵貨幣においてとらえて、投下資本のかかる滞留が、剰余価値生産に制限的に作用するという事実を、固定資本と貨幣の維持費が、ともに、社会の純収入からの控除をなす、という形で表現しようとしているのである。

投下資本の滞留、固定ということを、固定資本と貨幣においてとらえる直接の結果として、固定資本の維持にあてられるものを除く流動資本の三部分、(2)食料品、(3)材料、(4)完製品は、すべて、その「流動」を通じて、「社会の純収入の一部分」となる、つまり、その含意からいえば、現実に資本として機能して、剰余価値を生産する、ということになる。ここに、スミスが生産資本と商品資本を混同して、生産資本の生産物への転形と、商品の姿態変換を、と



もに「流動」という規定の下に一括してしまった、その背後の理由があると考えられるのである。

ところで生産資本、すなわち、労働力および生産手段の拡大された規模での生産的消費、かかるものとしての剰余価値生産の規模の拡大は、多かれ少なかれ、資本循環の各段階に固定され、滞留している資本価値の増大をとまう。したがって、そのためには、あらかじめ、追加的な価値が生産されていて、それが資本に転化されるのでなければならぬ。これは剰余価値の資本への転化、資本の蓄積にはかならない。

すでに述べたように、剰余価値の生産がくり返しおこなわれ、かかるものとして資本関係が再生産されうるためには、一方で、不変資本（生産手段）が生産的に消費され、労働者によって賃銀（必要生活手段）が個人的に消費されるとき、同時に、総資本の一部分によって、この生産手段と必要生活手段が、総生産物の一部分として再生産されているでなければならぬ。これが総資本の再生産、填補の条件であった（資本家による収入の消費は、しばらく度外視する）。

ところが、剰余価値生産の規模の拡大が、多かれ少なかれ、剰余価値の資本への転化、投下資本の増大をとまうものであるかぎり、総資本の拡大再生産、填補の条件は二重のものとしてあらわれる。それが拡大された規模での剰余価値の生産であるかぎりでは、生産的に消費される追加的生産手段と、追加的労働者によって消費される賃銀（必要生活手段）が同時に、その年の総生産物の一部分として、再生産されていなければならない。と同時に、拡大再生産が、剰余価値の資本への転化、投下資本の増大であるかぎりでは、追加的不変資本（生産手段）と追加的賃銀（必要生活手段）があらかじめ、前年の総生産物の一部分として、生産されていなければならない。

マルクスによる拡大再生産の表式は、以上の二重の条件を表現したものと考えられるが、その点については、あと

で詳しく検討するつもりである。

スミスは、剰余価値の資本への転化を、主観的に、資本家の「節約」、「貯蓄」として理解している。その結果として、資本の蓄積と耐久消費財の蓄積を混同している箇所すらある。「耐久性のある、したがって蓄積できるような物」に支出される収入は、「つねに貴重な商品の蓄積をもたらすものであり、個人の儉約にとっても、したがってまた、社会の資本の増加にとっても、有益なものであり、さらに、それは不生産的な人手よりもむしろ生産的な人手をやるものであるから、他の経費よりも、社会の富裕の増大に寄与するところがいっそう大きい。」(Wealth, p. 339~342 (2) 三六七~三七三ページ)

剰余価値の資本への転化を資本家の「節約」、「貯蓄」として理解した上で、スミスは、このようにして蓄積されたストックを追加的資本として機能せしめ、資本を増加させるものは、ほかならぬ追加的な生産的労働者であるとは考えないで、逆に、資本家の「節約」、「貯蓄」によって蓄積され、増加した資本(ストック)によって、以前よりも多くの生産的労働者がやしなわれると考えるのである。

「勤労ではなく、節儉が資本増加の直接の原因である。たしかに勤労は、節儉が蓄積する対象物を提供する。しかし、たとえ勤労がどれだけのものをつくりだそうとも、節儉がそれを貯蓄し、蓄積しないならば、資本がそれによって増加するということは、けっしてないであろう。」(p. 341 (2) 三五二ページ) 「社会においてじっさいに使用される有用な労働(生産的労働—引用者)の量の増加は、まったく、労働を使用する資本の増加に依存するはずであり、そしてまた、資本の増加は、その資本の使用を管理し、指揮する当人によってなされると、かれらに資本を貸すだけか他の人によってなされるとを問わず、収入からの貯蓄の量に、正確に等しいはずである。」(Wealth, p. 641 (3) 四五九

マルクスは、『剰余価値学説史』第四章の岐論で、あとのスミスの文章を引用して、剰余価値の資本への転化は「かれ自身にとっては、貯蓄としてあらわれるかも知れない。しかし、たんに準備金が必要であるようなばあいでも、それは、かれにとっては貯蓄のようにみえるのである」<sup>(1)</sup> (Mehrwert I S. 123 二三五ページ)と述べている。

拡大再生産が、多かれ少なかれ、投下資本の増大を必要とするかぎり、たしかに、資本に転化されるべき追加的価値が、あらかじめ生産されていなければならない。しかし、この追加的価値が資本として機能し、資本として蓄積されるのは、一方では、追加的価値が追加的生産資本の形態でたえず生産的に消費されると同時に、この同じ過程によって、追加的資本として再生産されることを通じてである。追加的労働者の賃銀は、かれ自身の労働によって増大した総生産物の一部によって支払われる。これが、資本家の蓄積したストックからの「前払」として現象するのは、労働者自身の生産物がたえずかれの手からはなれて、資本家の所有するストックとなり、労働者自身は、つねにストックをもたない賃労働者として再生産されるからである。拡大再生産のための追加的資本投下の必要は、資本を資本たらしめる剰余価値生産の基本的関係を、何ら変更するものではない。

スミスが、投下価値の資本属性を、資本の質料要素の属性として理解したことについては、すでに述べたとおりである。スミスは、拡大再生産の条件たる追加的資本投下の必要ということを、感性的に、資本関係そのものに先行すべき資本（ストック）の蓄積の必要としてとらえるわけである。

マルクスは、『剰余価値学説史』第三部のホヂスキンを論じた箇所で、資本家によるストックの蓄積という表象について、つぎのように述べている。「資本家が労働者のために生活手段を『蓄積』するということは……つぎのこと

「生産的および不生産的労働」について

に帰着する。(1)商品生産は、人が自分で生産したものでない消費手段を市場において商品としてみいだす、すなわち、商品が一般に商品として生産される、ということ的前提とする。(2)事実上、労働者によって消耗される商品の最大部分は、その商品が労働者にたいして商品として対立する最終形態においては、同時的労働の生産物であり、したがって、けっして資本家によって蓄積されたものではない。(3)資本主義的生産においては、労働者自身によってつくられた生産手段および生活手段が、前者は不変資本として、後者は可変資本として労働者に対立し、これらの労働者の生産条件は、資本家の所有としてあらわれる。これらのものが労働者の手から資本家の手に移り、そして労働者の生産物、またはその価値が一部分労働者の手に還流する、ということが、労働者のための流動資本の『蓄積』とよばれるのである。』(S. 351 三四九～三五〇ページ)

「経済学者たち」は「資本を一つの関係より一つの物、すなわち『商品のストック』に転ぜしめる。」(二三七ページ)

(1) ..... stellt sich aber ihm selbst unter der Notwendigkeit eines Reservefonds dar.

#### 四

スミスにあっては、ストックを資本たらしめるものが生産的労働であると同時に、労働を生産的労働たらしめるものは、ほかならぬ資本(ストック)であった。かかる資本関係の二面的把握は、直接には、労働力に投下された可変資本と、労働者の賃銀によって買われる生活手段のストック(商品資本)の混同にもとづくものであるが、かかる混同は、二つの事情によって、第一には、総資本の再生産、填補の必要ということが、第二には、拡大再生産における

剰余価値の資本への転化の必要ということが、ともに、生産的労働者をやしなうために、あらかじめ、資本家によって蓄積される資本（ストック）の必要としてとらえられた、という事情によって、生じたものである。

資本関係のかかる二面的把握から生ずる理論的帰結として、ここでは、つぎの三点をあげて、総括にかえることにする。第一は、資本機能が物質的生産と同一視されて、資本家が生産的労働者とみなされているということ、第二は、資本家の不生産的消費が、不生産的労働者の消費に帰着せしめられているということ、第三は、物質的生産の把握に資本属性がもちこまれているということである。

まず第一の点について。

スミスの生産的労働の第一の規定をつらぬくかぎり、資本の利潤は、労働者によって生産された価値のうち、賃銀（労働力の価値）をこえる部分、つまり、剰余価値に帰着し、資本は、かかる剰余価値を取得せしめる社会的な力、一つの生産関係としてあらわれる。マルクスのいうように、このばあい労働の生産性は、その「相対的生産性」(Mehrwert I S. 116 二〇ページ) にもとづくものである。しかるに、スミスは、資本関係にかんするその二面的な把握の結果として、剰余価値の生産を、かかるものとして、つまり、剰余労働の取得として、とらえることができない。そこで、剰余価値の生産は、その一般的なきそである商品（価値）の生産と直接に一致するものとして表現され、その上で、資本機能までが、生産的労働とともに、価値生産的なものとみなされることになるのである。

第二篇第三章の生産的労働を定義した箇所の冒頭の一文では、つぎのように述べられている。「労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる部類のものと、そのような結果をまったく生じない別の部類のものとがある。前者は価値を生産するのであるから、これを生産的労働とよび、後者は、これを不生産的労働とよんでさしつかえない

る。」(Wealth, p. 314 (2) 三三七ページ)

スミスが、剰余価値を生産する労働という規定とならべて、それと混同しながら、商品(価値)を生産する労働を生産的労働とよぶのは、スミス自身が述べているように、そのことによって、フィジオクラット批判を意図したものであることはあきらかである。スミスは、「工匠、製造業者、および商人の階級」は、かれらの生活資料を再生産するだけで、純生産物(地代)を生産しないが故に、「不妊の、あるいは不生産的な階級」である、とするフィジオクラットの見解を批判して、第四篇第九章でつぎのように述べている。「第一に、この階級が、かれらの年々消費するものの価値を年々再生産し、少くとも、かれらをやしない、かれらを雇用するストックまたは資本の存在を維持することは、(フィジオクラットによっても——引用者)みとめられている。とすれば、この理由(純生産物を生産しない——引用者)だけで、不妊、あるいは不生産的とよぶことは、この階級にたいしては不適当である。」「第二に……それ(召使の労働——引用者)とはちがって、工匠や製造業者や商人の労働は、とうぜん、それ自身をそのような販売しうるある商品に固定し、体現するのである。生産的および不生産的労働をとり扱った章で、わたくしが、工匠、製造業者、および商人を生産的労働者の中に入れ、召使を不妊あるいは不生産的労働者の中に入れたのは、以上の理由によってであった。」(p. 639 (3) 四五五〜六ページ) マルクスは、「こうして、フィジオクラットへの依存および対立において、『生産的労働』とは何かということにかんするかれの第二の規定が生ずる」(Mehrwert I S. 126 二二五ページ)と述べている。

スミスは、生産的労働を、商品(価値)を生産する労働と混同した上で、資本家もまたその労働を商品に固定し、実現するものであるから、かれら自身、生産的労働者である、と主張するのである。第二篇第三章では、そのこと

が、なお生産的労働を媒介として述べられていた。「節儉は、生産的な人手をやしなうために予定される基金を増加させることによって、その労働が加えられることによって対象の価値が増加するような人手の数を増加させる傾向がある。したがって、節儉は、その国の土地および労働の年々の生産物の交換価値を増加させる傾向がある。」(Wealth, p. 321 (2) 三五二ページ)ところが、第五章「資本のさまざまな用途について」になると、資本家の労働が、直接に、生産的労働である、といういい方にかわってくる。「以上の四つの方法のどれかに資本を使用する人々は、かれら自身生産的労働者である。かれらの労働は、それが適当な方面にむけられるならば、それが加えられる対象、あるいは販売しうる商品に、それ自体を固定し、実現して、一般に、その対象の価格に、すくなくともかれら自身の生活資料と、その他の消費するものの価値を付加するのである。」(p. 343 (2) 三九四ページ)マルクスは、このあとの文章を引用して、「ここにはまた、『生産的労働者』にかんするまったくあらたな定義がある」(Mehrwert I S. 226 三七六ページ)と述べている。

元来、スミスが、労働こそあらゆる物に支払われる本源的な価格であると述べ(Wealth, p. 30 (1) 一五一ページ)、また、「初期未開の社会状態のもとでは」という限定をつけてではあるが、この労働の量が交換価値の大きさを規定する(p. 44 (1) 一八五ページ)というときの労働は、生産の特殊な社会的形態、生産関係、とはかわりがないという意味での物質的生産を、その機能とするところの労働であったはずである。資本の利潤は、監督や指揮の労働にたいする賃銀ではないと述べるとき(p. 48 (1) 一八七ページ)、スミスは、資本家の機能が、基本的には、物質的生産を機能とする他人の労働を搾取するという点にあるのであって、けっして、それ自体が物質的生産の機能ではない、ということ、事実上、語っているのである。

資本は、生産の発展の歴史的必然であつて、まさに物質的な生産関係である。かかるものとしての資本関係の存在を前提すれば、資本なくして社会的生産がありえないことは、とうぜんのことである。しかし、このことは、資本関係の実体的なきそが剰余労働の取得にあること、したがって、資本機能は、物質的生産の機能とは区別される特殊な社会的機能であることを、否定するものではない。

スミスが、資本機能を物質的生産の機能と同一視して、資本家そのものを生産的労働者と考えたことと、その価値規定において、いちおう、交換価値の大きさを労働の量によって規定しながら、けっきよく、生産費説に転落していくこととは、まさにうらはらの関係にある。

スミスは、同じ章で、ストックが蓄積されて、「勤勉な人々」をやとつのに使用されるようになると、と前おきをして、付加価値を賃銀と利潤に「分解」(p. 88 (1) 一八七ページ)したあと、とつぜん、労働の量による交換価値の大きさの規定をなげすてる。「ある商品のかく得または生産に一般についてやされる労働の量は、その商品が一般に購買し、支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規定しうる唯一の事情ではない。」(p. 88 (1) 一八九ページ)そして、剰余価値が分配される形態である利潤と地代を、交換価値の「本源的な源泉」に転化してしまうのである。「賃銀、利潤、および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉であると同時に、いっさいの収入の三つの本源的な源泉である。」(p. 88 (1) 一九六ページ)

付加価値のうち、賃銀等価部分は資本家にとって資本であり、剰余価値部分は資本家、地主などの収入になる、という事情は、この価値の実体、その大きさとは何の関係もないことである。マルクスは、スミスのこの文章を批判して、つぎのように述べている。「この剰余価値取得、または、投下価値の再生産と、何らの等価も填補しない新価



値（剰余価値）の生産とへの、この価値生産の分割は、価値そのものの実体および価値生産の本性を少しも変化させるものでない。」(Kapital I S. 388 (7) 五〇三ページ)

スミスにあっては、まさにマルクスのいうように、「生産的労働者の讚美らしくみえるのは、事実上、自分の収入だけで生活する地主や『金貸し資本家』と対立させた産業資本家の讚美にすぎない」(Mehrwert I S. 233 三八六ページ)のである。

## 第二の点について。

資本家の労働は、それが加えられる対象に、「かれら自身の生活資料とその他の消費するものの価値」を付加するのであるから、かかるものとしての資本家の消費は、生産的労働者の消費と同様に、生産的消費としてあらわれることになる。

スミスは、第二篇第三章の後半で、「もろもろの資本は、節儉によって増加され、浪費や不始末によって減少する」(Wealth, p. 321 (2) 三五二ページ)と述べて、収入の不生産的消費によって、社会の蓄積ファンドをくいつぶす浪費家たちに、筆誅を加えているが、スミスのいうところをたどってみると、はじめ資本家自身の不生産的消費とみえたものは、けっきよく、かれらに寄食する不生産的労働者の消費に帰着するのである。

「生産的労働者も不生産的労働者も、さらにはまったく労働しない人々も、そのすべては、その国の土地と労働の年々の生産物によって、ひとしく、やしなわれるものである。……ある年に不生産的な手をやしなうのに使用されるこの生産物の割合が小さいか大きいかに応じて、前者のばあいにはいっそう多くの生産物が、また後者のばあいにはいっそう少ない生産物が、生産的な人手のためにのこされるであろう……。」(p. 315 (2) 三四〇ページ) ここでは、

「生産的および不生産的労働」について

生産物が資本として消費されるか、収入として消費されるか、生産的に消費されるか、不生産的に消費されるかの二者択一が、労働が生産的であるか、不生産的であるかの区別と直接に一致するものとして述べられている。その上で、資本家による収入の不生産的消費が、資本家とは区別された不生産的労働者や「怠け者」の責に帰せられるのである。「富者が年々その収入から費消する部分は、たいていのばあい、怠惰な客人や召使によって消費されるのであって、かれらは、自分たちが消費するのとひきかえに、一物をもそのあとにのこさない。」(G. 321 (2) 三五二ページ)

生産的労働と不生産的労働の区別は、労働力にかんする生産的消費と不生産的消費の区別にほかならない。生産的労働者による賃銀(必要生活手段)の消費が生産的消費とよばれるのは、かれらの労働力が生産的に消費されるということの不合理な表現であった。スミスにしたがって、不変資本部分を無視するならば、たしかに生産的消費者は、直接に生産的労働者と一致する。しかし、だからといって、不生産的消費者の方も不生産的労働者と一致するわけではない。不生産的労働者の労働力が、サービスとして、不生産的に消費されるのと同様に、生産物(奢侈品)もまた、不生産的に消費されるのである。資本と収入、生産的消費と不生産的消費の区別は、労働が有形物に固定して、ストックとして蓄積されうるような商品をあとにのこすか、それとも、労働がおこなわれると同時に消失してしまつて、あとに何ものこさないか、という、生産的労働と不生産的労働の第二の区別とは何の関係もないことである。

しかるにスミスは、労働力に投下されて、自らを維持、増殖する資本と、労働者の賃銀によって買われる必要生活手段のストックを混同し、その上で、投下された価値が資本として維持されるということ、つまり、資本としての価値の持続性を、感性的に、ストックの質料的要素の耐久性として理解する。これらの点については、すでに述べたと

おりである。

したがって、スミスが資本というとき、それは、生産的労働者をやしない、また生産的労働者によって再生産される、多かれ少なかれ耐久的な必要生活手段のストックにほかならない。まさにそのことに照応して、スミスは、生産的に消費されてしまつて、回収されることのない収入を、感性的に、労働がなされると同時に消滅してしまつて、あとに何ものこさないサービスの姿で理解するのである。その結果、スミスにあっては、生産物を生産的に消費するか、不生産的に消費するかの区別が、資本（ストック）を生産する労働であるか、不生産的労働（サービス）であるかの区別と、直接に一致するものとしてあらわれる。そして、資本を蓄積し、年々の生産物の交換価値を増大するという栄光が、資本家の「節儉」と労働者の「勤勉」に帰せしめられる一方、それ以外のあらゆる社会的機能（サービス）をいとなむ人たちは、収入によってやしなわれ、資本蓄積を阻害するが故に、「浪費家」、「怠け物」として、一把一からげに、糾弾されることになるのである。一方で、産業資本家と労働者が、人間と自然の間の質料変換における生産の契機を代表し、他方で、その他の不生産的労働者が、消費の契機を代表する。これが、まさに産業資本のイデオログたるスミスのえがく社会像であつた。

スミスは、賃銀、利潤、および地代を交換価値の三つの本源的な源泉に転化せしめたあと、これらの収入が「いっさいの収入の三つの本源的な源泉」であつて、不生産的労働者の収入は、この本源的な源泉からひきだされる「派生的収入」である、と述べている（p. 330）。(1) 一九六く七ページ）。スミスのあげる不生産的労働者のうち、「主権者、ならびにその下に奉仕する司法および軍事のいっさいの官吏、陸海軍の全軍人」（国家機関）、「聖職者、法律家、医師、すべての種類の文士、俳優、道化師、音楽家、オペラ歌手、オペラの踊り手など」（精神的生産）の労働は、多

かれ少なかれ、資本主義的生産（産業資本）から「派生」した社会的機能である。その意味では、生産的労働者の剰余労働を取得するという産業資本の機能が、もっとも「本源的」な社会的機能ではあるけれども、だからといって、産業資本の利潤が、これら不生産的労働者の収入の源泉であるわけではない。マルクスは、スミスのこの文章を引用して、直接再生産にたずさわらない社会成員が、かれらのわけ前を、生産物を第一番に入手するものの手からのみひきだすことができるのは、とうぜんのことであるが、「他面、この意味でのかかる派生的収入の受領者たちは、王、僧侶、教授、淫売婦、兵卒などとしてのかれらの社会的機能によってこの収入をうるのであり、したがってかれらは、かれらのかかる機能を自分の収入の本源の源泉だとみなすことができる」と述べている（*Kapital* II S. 374~5 (748~5 ページ)）。したがって、スミスが収入について本源的と派生的の区別をする観点は、このばあいにも、資本蓄積の観点であり、しかも、剰余価値の収入としての不生産的消費を、産業資本家の消費にではなく、もっぱら、不生産的労働者の消費に帰着せしめた上での蓄積の観点にはかならないと考えられる。

### 第三の点について。

スミスが、資本機能を物質的生産の機能と同一視し、資本家を生産的労働者としてえがきだしたことについては、すでに述べたとおりである。このことは、まさに盾の反面として、物質的生産、使用価値の生産一般が、スミスにあつては、その抽象性においてとらえられないで、すでに「資本主義的生産時代の扮装」（*Kapital* II S. 391 (750~751 ページ)）の下にあらわれる、ということの意味する。

すでに述べたように、スミスは、「それが加えられる対象の価値を増加する」ような労働、「価値を生産する」労働を、生産的労働とよんでいる（*Wealth*, p. 314 (2337 ページ)）。剰余価値を生産する労働が、同時に、商品（価値）

を生産する労働でなければならないことは、とうぜんのことである。したがつて、マルクスがいのように、商品（価値）を生産する労働という第二の規定は、「すでに、第一の規定に事実上ふくまれている規定」（Mehrwert I S. 127 二二六ページ）であるといえる。しかし、そのばあいの商品（価値）は、あくまで、単純な商品としての抽象性においてとらえられた商品でなければならない。

しかるに、スミスの生産的労働にかんする第二の規定は、一方では、かかるものとしての商品（価値）を生産する労働であるが、他方では、すでに述べたように、有形物に固定されて、「ストックされ、たくわえられる一定量の労働」であり、「必要に応じて、はじめにそれを生産したのと等量の労働を活動させる」ような労働である（Wealth, p. 314~5 (2) 三三七~八ページ）。これは、事実上、資本（ストック）を生産する労働ということであった。

商品（価値）は、人間にとって対象的な、外的な存在ではあるけれども、かならずしも、ストックとして蓄積されるような有形物であることを必要としない。使用価値とは、「その社会的形態とは無関係な、富の質料的内容」（Kapital I S. 40 (1) 一一五ページ）であつて、そこには、耐久性というような属性はふくまれていないのである。スミスの第二の規定に述べられている耐久性という属性は、まさに、ストックに固定されている価値の、資本としての持続性という属性が、生産物の質料的属性として、もちこまれたものにはかならない。<sup>(1)</sup>

剰余価値を生産する労働としての第一の規定も、スミスにあつては、かかるものとしてとらえられているわけではない。すでに述べたように、一方では、資本家のストックを資本たらしめるものが生産的労働であるが、他方では、生産的労働者をやしない、生産的労働を生産的労働たらしめるものが、ほかならぬこの資本（ストック）であつた。生産的労働の第二の規定における二面性は、この資本関係についてのスミスの二面的把握の直接の反映なのである。

マルクスは「商品」は、ブルジョアの富のもっとも原基的な形態である。したがってまた、『生産的労働』とは『商品』を生産する労働だという説明は、生産的労働とは資本を生産する労働だという説明よりも、はるかに原基的な立場に照応するものである」(Mehrwert I S.136「三九ページ」)と述べているが、これは、以上のような意味に理解されなければならぬ。

スミスは、不生産的労働者として、第一に「召使」、第二に「主権者、ならびにその下に奉仕する司法および軍事のいっさいの官吏、陸海軍の全軍人」、第三に「聖職者、法律家、医師、すべての種類の文士、俳優、道化師、音楽家、オペラ歌手、オペラの踊り手」などをあげている(Wealth, p.315 (2) 三三九〜三四〇ページ)。

第一の「召使」の労働は、料理、裁縫、洗濯、掃除など、そのおおくが、マルクスのいう「消費費用」(Mehrwert I S.147, S.173, S.369 二五六ページ、二九七ページ、五九四ページ)に属するものである。これらの労働は、有形物の生産としてあらわれると、サービスとしてあらわれるとを問わず、消費そのものとは区別される、生産的な機能である。第二の官吏、軍人などの労働は、国家機関の機能であり、第三の人々の労働は、マルクスのいう「精神的生産」である。

マルクスは、『剰余価値学説史』第四章「生産的および不生産的労働」のシュトルヒを批判した箇所で、精神的生産について、つぎのように述べている。「スミスは精神的生産を考察していない」し、また、物質的生産と精神的生産の「相互作用および内的関連も、やはり、かれの考察範囲にはいっていない」が、「精神的生産と物質的生産との関連を考察するためには、何よりもまず物質的生産そのものを一般のカテゴリーとしてでなく、規定された歴史的形態においてとらえることが必要である。」(S.247〜8 四〇七〜八ページ)なお、精神的生産については、あとでまとめて

検討する予定である。

スミスは、かれらの労働は、なされると同時に消滅してしまつて、あとに何ものこさないから、不生産的労働であるといつて、これらのさまざまに機能を異にする人々を、一把一からげに、たんなる消費者、他人の生産物への寄食者と規定する。すでに述べたように、ここには、収入として不生産的に消費された生産物の価値が、消滅してしまつて、回収されることがないという、再生産上の機能にかんする規定が、質料的規定として、もちこまれているのである。

(1) 遊部久蔵氏は、有形物に固定されて、ストックとして蓄積されうるような労働という規定を、生産的労働の「第三の規定」として、商品（価値）を生産する労働という規定から区別される。そして、この「第三の規定」において、マルクスのいう「本源的规定」(Kapital I S. 189 S. 533~4 (2) 三三五ページ (3) 八〇三―四ページ)をよみとらうとしておられる。遊部著「古典派経済学とマルクス」第一章、「生産的労働とサービス」三田学会雑誌三十二年十二月号 参照。

この「第三の規定」は、スミスが物質的生産をその抽象性において理解することができず、そこに資本属性をもちこんだ結果であるから、むしろ、スミスには生産一般の「本源的规定」がないことの表現だと解すべきではなからうか。

高島善哉氏は、この規定は、スミスにおける「社会的資本の再生産」の観点の表現ではあるが、けつきよく、価値と使用価値の統一としての商品を生産する労働という第二の規定に帰着するといわれる。高島編「経済学説全集」第二卷第六章Ⅲ参照。金子ハルオ氏もほぼ同じ見解のようにみうけられる。「アダム・スミスにおける生産的労働の概念」都立大創立十周年記念論文集 参照。

本文で述べたように、耐久性という属性は、使用価値一般にそなわる属性ではない。また、「社会的資本の再生産」に関連して問題になる使用形態上の区別は、生産的に消費されうるか否かであつて、けつして、有形物であるかサービスであるかではない。ここでのスミスの含意が、資本（ストック）を生産する労働にあることはあきらかである。

(未完)